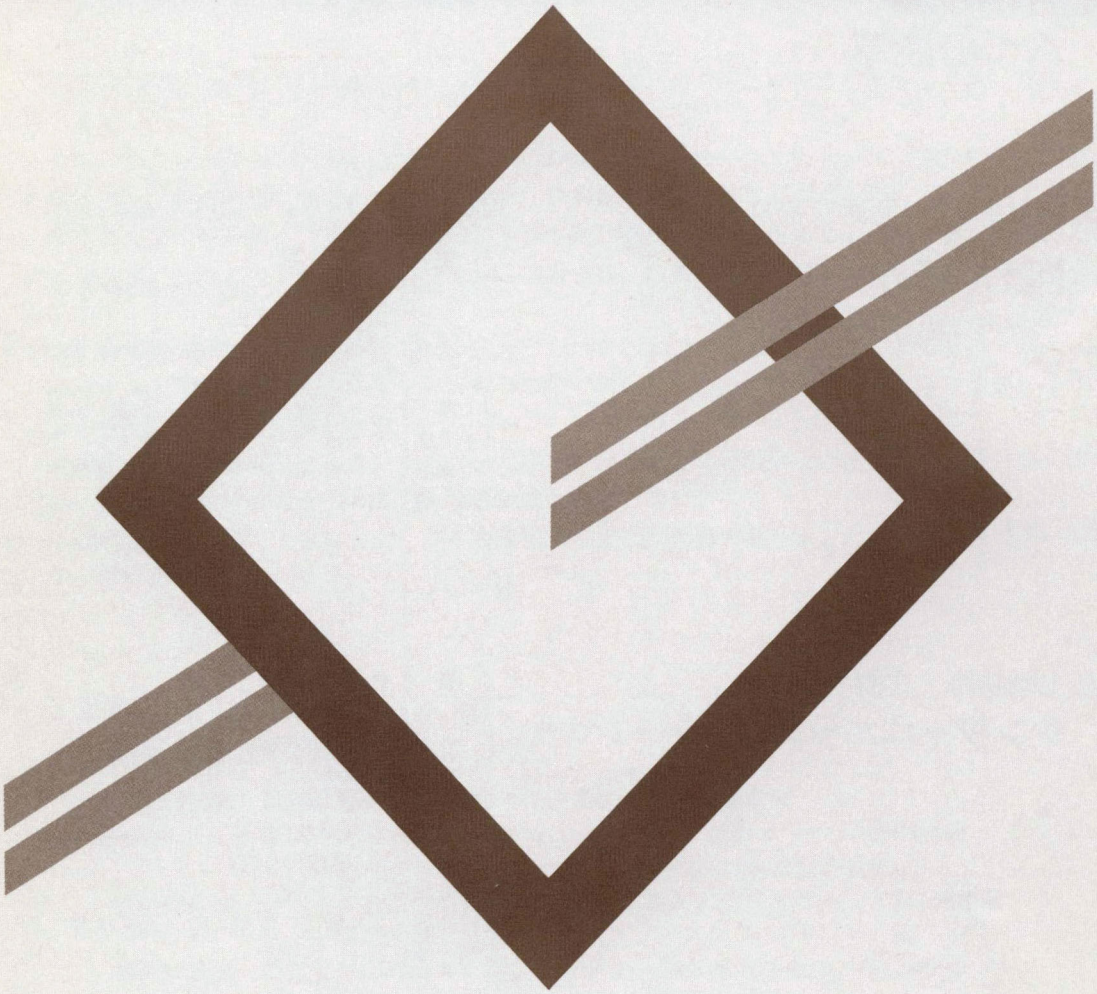
PRO MUSICA NIPPONIA

日本音楽集団

第125回◈定期演奏会— 秋のコンサート



1992年10月6日(火) 午後7時開演

朝日生命ホール

主催／日本音楽集団

プログラム

～現代邦楽の黎明期を演出した清水脩の作品三題～

1. 二面の箏と十七絃のための
三つのエスキス

〔　箏　〕Ⅰ＝木村 玲子　Ⅱ＝熊沢栄利子
〔十七絃〕宮越 圭子

2. 箏独奏のための
六つの断章

〔箏独奏〕白根きぬ子

3. 柳川風俗詩（北原白秋）より
四つのうた
～女声合唱と日本楽器による～

〔女声合唱〕福島市おかあさん合唱団（客演）
〔　笛　〕竹井　誠
〔尺　八〕Ⅰ＝米澤　浩　Ⅱ＝石田 忠史
Ⅲ＝添川 浩史
〔三味線〕細棹Ⅰ＝太田 幸子　Ⅱ＝工藤 哲子
太棹＝田中悠美子
〔　箏　〕Ⅰ＝内藤 洋子　Ⅱ＝山田 明美
〔十七絃〕Ⅰ＝宮越 圭子　Ⅱ＝大泉 一美
〔打楽器〕Ⅰ＝前田 文男　Ⅱ＝臼杵美智代
〔指　揮〕田村 拓男

休　憩

4. 上野耕路・作曲
シンフォニエッタ・ルラーレ（仮称）
委嘱作品・初演

〔　笛　〕竹井　誠
〔尺　八〕Ⅰ＝米澤　浩　Ⅱ＝石田 忠史
Ⅲ＝添川 浩史
〔三　絃〕原田富士恵
〔琵　琶〕丹野 さえ
〔　箏　〕Ⅰ＝内藤 洋子　Ⅱ＝城ヶ崎美保
Ⅲ＝熊沢栄利子
〔十七絃〕山田 明美
〔打楽器〕Ⅰ＝前田 文男　Ⅱ＝望月太喜之丞
〔指　揮〕田村 拓男

5. 三木稔・作曲
凸（とつ）
～三群の三曲と日本太鼓のための協奏曲～

〔指揮・日本太鼓〕田村 拓男
〔笛・能管〕竹井　誠
〔尺　八〕高音＝米澤　浩　低音＝添川 浩史
〔三　絃〕細棹＝太田 幸子　太棹＝田中悠美子
〔琵　琶〕半田 淳子
〔　箏　〕十三絃箏＝熊沢栄利子
二十絃箏＝内藤 洋子
十七絃＝宮越 圭子

清水脩の音楽創造

上野　晃

清水脩といえば、わが国合唱音楽の父、という衆論はもうすっかり根をおろしている。言葉を有する音楽作品は、彼の終生にわたる音楽創造の中心であったが、いわゆる合唱作曲家ではなかった。あまりにも有名な《月光とピエロ》(1949年)、まるで器楽曲のようなタイトルの《越天楽の主題による変奏曲》(1953)、ダークダックスのために書かれた《山に祈る》(1960)、などに代表される夥しい数の合唱作品は、四百曲近くに達する。そのなかには《蓮如》(1947年)、《平和》(1948)、《樹下燦々》(1950)、《降誕讃歌》(1952)、といった仏教音楽のための交声曲（カンタータ）も少なくない。こうした比較的規模の大きい声楽作品が連山のように続く一方では、オーケストラ作品の作曲にも早くより意欲を燃やしてきた。

第８回音楽コンクールに第１位入賞してデビュー作となった《花に寄せたる舞踊組曲》(1939年)は三管編成の管弦楽曲、そして第２次世界大戦後ほとんど初の芸術的仏教音楽作品として管弦楽曲《ルンビニの春への前奏曲》(1946) を書いた。また芸術祭文部大臣賞を受けて出世作となった《インド旋律による四楽章》(1950) は、交響曲と称しても差し支えないくらいの構成で書かれている。これらは、真宗大谷派寺院を生家とし、大阪四天王寺の雅楽の伶人を父にもった作曲家として、当然の創作の軌跡といえるだろう。生来の環境といえる日本の伝統、自身で培ったフランス近代音楽の教養、そして峻烈な批評精神の交わるところに生み出された清水作品。

太平洋戦争勃発の年に作曲された箏独奏曲三つは、最初期の30歳のものだが、そのうちでも《**六つの断章**》(1941年) は、難曲の名曲として多くの箏曲家に手がけられてきた。宮城道雄の高弟古川太郎との交友が作曲の直接の契機ながら、夙に宮城道雄の古典の演奏には惹かれていた、その回答として書かれたともいえる。左手の主旋律と右手の対旋律による二声の組み合わせ、各章毎に特殊な新しい調絃などが施されている。〈現代邦楽〉というような呼称やジャンルが生まれるおよそ二十年もまえの記念碑的作品だ。それより丁度二十年後の《**三つのエスキス**》(1961) は、ＮＨＫの委嘱で作曲された二面の箏と十七絃による三重奏曲。これも名手たちの秀演にいく度か接してきたが、シンプルながら音の密度の高い、ダイナミックな動きを見せる、いかにも清水脩の箏音楽らしい。やはりＮＨＫ委嘱作の《**柳川風俗詩より四つのうた**》(1967) は、女声合唱と邦楽器アンサンブルによる、まさに清水脩のもっともエッセンシャルな二大領域が重ねられたような作品といえよう。約四十年間に四十作品近くをかぞえる箏を主とした邦楽器のための作曲は、とても家系や血筋と無関係に考えられない。

歌劇第一作の《修禅寺物語》(1954年) は、歌舞伎の科白に沿って作曲された最初のオペラでもあり、いまなお日本オペラの最重要作に変わりない。その後、能にもとづく《俊寛》(1964)、《大佛開眼》(1970) などの歴史ものないしは伝統芸能によるもの、《炭焼姫》(1956)、《セロ弾きのゴーシュ》(1957)、《吉四六昇天》(1973) などの民話や童話による系列、それから現代に題材を求めた《青空を射つ男》(1956) なども含めて、約二十五年間に十五のオペラを作曲した。背後には、名人芸や職人気質、あるいは何かに取り憑かれた執念の人間、といったものが劇音楽作品に一貫しているが、日本のオペラを音楽運動でなく社会的運動として〈われらがオペラ〉を目指した創作姿勢はまた、合唱作品にも顕著にうかがえる。低レヴェルでの単なる合唱音楽の普及でなく、アマテュア合唱の水準を引き上げるための創造的な合唱作品、というのが理念であったようにも思える。今日の限りなくプロに近づくアマテュア合唱の基盤は、ここから築かれてきたといって過言でない。

曲の解説にかえて

上野耕路

一日中、作曲に取り組むものの、夜も更けると、どうにも足がレンタル・ヴィデオ屋に向いてしまい、映画を見てしまうという毎日が続きました。それで分かったのですが、最近活躍のダニー・エルフマンという作曲家は、今から十年程前、「オインゴ・ボインゴ」というロック・バンドをやっていた人で、まさかそんな人が、オーケストラによる、いかにも映画音楽然とした音楽を書いているなんてとても信じられないといった仕事をしていました。思えば、だいたい自分のプロフィールも似たようなものです。もっとも、その人は、オーケストレイターとミュージック・エディター(映画のどこにどんな音楽をあてるか決める、最近外国で生まれた職種）とチームを組んでやっているようですが、そこは大きな違いです。だから、もしこの曲の響きや音量バランス、曲のフォーム等が悪いとしたら全て私の責任です。こんな私に貴重な体験を与えてくれた田村拓男さん、彼が私に委嘱する決心をつけるきっかけとなった作品を私に依頼してくれたマリンバ奏者の吉川雅夫さん、楽器のことで相談に乗って下さった伊福部昭先生、民謡の木津茂理さん、かおりさん姉妹、以上の方々にたいへん感謝しております。題名については、いずれ折をみて漢字によるものを考えたいと思っています。

上野耕路　プロフィール

1960年、千葉生まれ。大学で作曲を専攻するものの、ポピュラー音楽に没頭してしまい、その後、バレエ、映画音楽、舞台音楽を経て、純音楽へ至ろうと模索中。
第44回毎日映画コンクール音楽賞受賞。
現在までの主な作品：「アルト・サクソフォン、ピアノ、弦楽のための三章」、「マリンバとピアノのためのディヴェルティスマン」、「弦楽のためのバッハの名による三章」、バレエ音楽「あたま割人形」、「クラリネット四重奏のための幻想的バーレスク」
ＣＤ：「アルト・サクソフォン、ピアノ、弦楽のための三章、他」、「レゼルヴォワール」
著書：「伊福部昭の宇宙」(共著)

「凸(とつ)」について

田村拓男

日本音楽集団の作品には、その演奏家が存在したから生れたといえるものが多い。笛がいなかった創立当時の「子供のための組曲」(管パートは尺八３本で笛が入ってない)、笛や太棹三味線の参加で生れた組曲「人形風土記」、後に加わった野坂恵子が三木稔の協力で開発した二十絃箏の加入、畦地慶司の胡弓の参加等々、日本音楽集団史も早い時期に編纂しなければと思っています。

「凸（とつ）」も打楽器奏者で指揮も行うようになった私を念頭において三木稔が書いた曲です。この曲の発想といい、構成といい絶対的な名曲といえます。曲の分析をするスペースはないので作曲者の言葉を一部紹介しましょう。「第一部は私たちの芸術音楽の理念から私なりの継承を行いつつ、それらへの苛立ちの表明をしたつもりです。奏者たちは本質的に自由であって欲しいのです。第二部では第一部で沸騰して抑制できなかったものが自然にこぼれるように動き出してリズムが形成できたらなあと考えました。三つの三曲合奏を左・中・右に分散し、それらを統轄する形で日本太鼓がいることは、今までの音源の固定を排除して群の中での拡がりを獲得できます。そしてあたかも非統制、個を主張し合う各楽器という印象でありながら、各音色群の非連帯の連帯へと一次元昇ることが可能であると信ずるのです」(レコードジャケットから)

尚、終盤近く特定楽器のカデンツァを入れてもよいことになっており、今回二十絃奏者の内藤洋子が展開します。

福島市おかあさん合唱団　プロフィール

パレストリーナの研究家としても知られ、日本合唱界屈指のオーソリティ高野廣治氏を指揮者に戴き、今年で創立36年。1990年全日本おかあさんコーラス全国大会（日本合唱連盟・朝日新聞社主催）のグランプリ獲得。

一昨年、福島市音楽堂で行った日本音楽集団の演奏会を初めて聴いたメンバーが、清水脩の「四つのうた」は是非オリジナルの邦楽器と共演したいという熱意が、昨年の同団創立35周年記念コンサートを成功させ、今回の東京での再演にもつながった。

メッセージ

福島市おかあさん合唱団
代表　石井多実子
団員一同

125回の定演、おめでとうございます。この度、秋のコンサートにお招き載きまして誠に有難うございます。

昨年、私共の演奏会で35周年の節目に、特に印象深い作品の一つであります「四つのうた」を、原曲に戻って日本楽器で演奏をする事になり、日本音楽集団のお力で実現することができました。

清水脩先生のお言葉に「邦楽的発想による日本的な艶っぽさ、節まわし」とありましたが、邦楽器の響きは、それをより色濃く、情感豊かに現わされ、白秋の詩の情緒が懐かしく心を満してくれたのです。

長い間愛唱してきましたこの曲が、また別な息づかいを始めた思いがいたしました。

あれから１年、「四つのうた」を、あの響きの中で歌いたいとの私達の夢が叶えられる事になり、よろこびでいっぱいでございます。

今日このホールにお集り下さいました皆々様に〝邦楽と合唱の出会い〟を楽しんで載けます様に、団員一同心をこめて歌いますので、どうぞお聴き下さいませ。

本日私共にお力添え下さいます、日本音楽集団の皆様、御指導戴きました田村拓男生に深い感謝と共に厚く御礼申し上げます。

日本音楽集団の今後の主な予定

11月24日(火)　**日本音楽集団第126回定期演奏会・秋の総合定期**
みずみずしい浪漫～三木稔の季(とき)／津田ホール／19:00開演
古代舞曲によるパラフレーズ・「わ」・黄の鐘(待望の新作！)

12月12日(土)　日本音楽集団〝邦楽器の玉手箱〟／新所沢公民館ホール／18:00開演
ファンタスマゴリア・冬の一日・クリスマス メドレー　他

12月12日(土)　佐世保市制90周年記念コンサート／佐世保市民会館／18:30開演
ファンタスマゴリア・華やぎ・キビタキの森　他

93年１月22日(金)　日本音楽集団埼玉音鑑コンサート／大宮ソニック・シティ／18:30開演
大津絵・巨火・華やぎ　他

１月23日(土)　日本音楽集団葛飾コンサート／かつしかシンフォニーヒルズ／15:00開演
大津絵・巨火・萌春　他

１月28日(木)　**日本音楽集団第127回定期演奏会**／津田ホール／18:00開演
第４回〈邦楽器の祭典〉～作曲家との共同作業で

日本音楽集団　〒151 東京都渋谷区笹塚３-17-１滝沢ビル303
TEL.03-3378-4741(代)　FAX.03-3376-2033

オリジナル立奏台

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に
音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和樂器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481
FAX(3792)8437